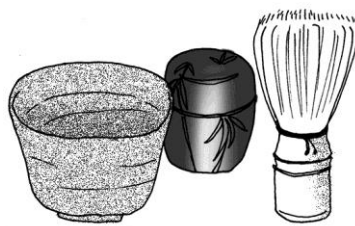


なぜこの道を選んだのか



え・古屋智子

今週は、本紙の発行元である倫理研究所の、ある研究員のエピソードを紹介します。

九州に住むA君は、当時高校三年生でした。実家は自営業でした。

十月のある日曜日、店の準備をする父親の様子がおかしいのです。すぐに病院へ搬送され、検査の結果、脳内出血と診断されました。

手術は成功したものの、術後の父はもうろうとして、別人のようです。会話もできない状態でした。

父の入院から一週間後、A君のもとに一本の電話がありました。電話の主から「倫理研究所に入ること決めましたか」と尋ねられました。意味がわかりません。

実は、倫理を学んでいる母が、進路を決めかねているA君のことをB研究員に相談していたのです。

寝耳に水の話でしたが、両親が長年、倫理を勉強する姿は見ています。〈これも親孝行だ〉と、A君は面接を受けることにしました。

一月十四日、九州に出張中だったB研究員が、A君の家を訪れ、面談が行なわれました。

翌十五日、父が入院以来、久しぶりに一時帰宅をしました。というのも、父の病院を見舞ったB研究員から、「一度自宅に連れて帰っては」と提案があったからでした。

入院中の、父の精神的な落ち込みは相当なものだったのです。家には帰ったものの、父親は鬱のような状態です。話しかけても反応がありません。時間ほど経過し、B研究員がこう話しかけた時のことです。

「病気になって大変でしたね。幼少の頃から、きつとご苦労が絶えなかったのでしょうか」

次の瞬間、うつむいていた父が顔を上げ、何か言おうとしました。ろれつがまわらない口元に耳を近づけると、父は「そんなことはない」と言っていたのです。

それから父は、徐々に幼い頃のことを話し出しました。兄弟が多く貧乏だったけれど、両親が可愛がってくれたことなどを話すうちに、父の顔色は良くなり、生気が戻ってきたようでした。そして、「このままではいけない。子供たち

のためにも元気になりたい」と涙ながらに話すのです。

父はその日のうちに病院へ戻りました。あれほど弱々しく見えた父が、帰りには、歩いて階段を下りる様子を夢のような思いでA君は眺めました。そして、B研究員に「倫理研究所にお世話になりました。ありがとうございます」と、決意を告げたのです。

その後A君は、倫理研究所の研究員となりました。

業務に追われ、瞬くように歳月が過ぎた一昨年、父が七十六歳で亡くなりました。訃報を聞き、実家に戻ったA君ことA研究員。亡き父の枕元で〈おつかれさまでした〉と声をかけながら、ひと晩を同じ部屋で過ごしました。

その日は奇しくも一月十五日でした。二十四年前、「誰かを力づけられる人になりたい」という決意を胸に、自ら入所を決断した日です。父の安らかな表情に、まるで「自分で決めた道を貫きなさい」と言われているようにも感じたのでした。

「このままではいけない。子供たち

のためにも元気になりたい」と涙ながらに話すのです。

父はその日のうちに病院へ戻りました。あれほど弱々しく見えた父が、帰りには、歩いて階段を下りる様子を夢のような思いでA君は眺めました。そして、B研究員に「倫理研究所にお世話になりました。ありがとうございます」と、決意を告げたのです。

その後A君は、倫理研究所の研究員となりました。

業務に追われ、瞬くように歳月が過ぎた一昨年、父が七十六歳で亡くなりました。訃報を聞き、実家に戻ったA君ことA研究員。亡き父の枕元で〈おつかれさまでした〉と声をかけながら、ひと晩を同じ部屋で過ごしました。

その日は奇しくも一月十五日でした。二十四年前、「誰かを力づけられる人になりたい」という決意を胸に、自ら入所を決断した日です。父の安らかな表情に、まるで「自分で決めた道を貫きなさい」と言われているようにも感じたのでした。

「このままではいけない。子供たち